

# 日本におけるリトミックの実態に関する研究

— 幼児教育の分野を中心に —

The current status of Eurhythmics in Japan

— Focusing on early childhood education —

長 島 礼 \*

## Abstract

This questionnaire study was conducted on parents raising children between infancy and childhood with the aim of clarifying their images and understandings of Eurhythmics obtained through information from various organizations and their own experience. The questionnaire results were compared to the history of Eurhythmics in the field of early childhood education in Japan in order to investigate the effect of the history of eurhythmics in the field of early childhood education in Japan on the images and understandings of Eurhythmics of parents.

Questionnaire results showed that parents of children between infancy and childhood see Eurhythmics as “part of early childhood education implemented by early childhood education specialists”, and that they also understand it vaguely as “an element of music education”. This understanding is due to the fact that Eurhythmics as a music education method is widespread mainly in the field of early childhood education in Japan where, historically, implementation of Eurhythmics has been associated with the musical nature of nursery teachers, who are specialists in early childhood care, and with rhythmic expressive activities in early childhood care. This historical context seems to have created ambiguity regarding the difference between “Eurhythmics” as a music education method, and “rhythmic expressive activities” implemented in early childhood care.

キーワード：幼児教育、リズム表現活動、リトミック

## はじめに

我が国のリトミックは、受容の歴史的経緯によって主に幼児教育の分野で普及され知名度を上げてきた。そしてその背景には、保育の場で求められるリズム表現活動と、リトミックの実践方法が合致しやすかった点が指摘されている。筆者は過去に、我が国の幼児教育の分野におけるリトミックの現状を把握するための一環として、保育者の見解を基に、保育の場におけるリトミックの現状を調査した（長島2010）<sup>1)</sup>。その調査によると、リトミックの名称を知らない保育者はおらず、保育実践にリトミックを取り入れたいと考えている保育者が多いという結果が得られた一方で、リトミックに対する理解は伴っておらず、「音楽に合わせて身体表現する」という

視覚的情報に頼ってリトミックを捉えている傾向があった。そして実際の保育の場では、リトミックを実践するというよりも、子どもたちが楽しめる音楽表現活動であることに主眼が置かれていることが窺えた。

本研究では、乳児期から児童期までの子どもを抱える保護者が、様々な機関における情報や体験をもとに、リトミックをどのように捉えイメージしているのかということ、質問紙調査を通して明らかにする。そしてその結果を、我が国の幼児教育の分野におけるリトミックの歴史や、保育の場におけるリトミックの実態と照らし合わせ、我が国の幼児教育の分野においてリトミックがどのように認識されているのか、ということについて検討する。

\* Rei NAGASHIMA 教育学部専任講師

1) 長島礼 (2010) 「保育現場におけるリトミックの理解に関する一考察」 関西学院大学教育学論究 第2号 pp.89-94

## I. 子育て中の保護者のリトミックに対する認識調査

### I-1. 目的と方法

#### (1) 目的

本調査では、乳児期から児童期の子どもをかかえる保護者を対象に、リトミックについてどの位の知識や理解があるのかということ、質問紙調査によって明らかにする。

#### (2) 調査対象

兵庫県下の保育所を利用している120世帯（0歳～5歳の乳幼児を抱える保護者）と、兵庫県と大阪府在住の、乳児期から児童期の子育てに関わる保護者66世帯の、合せて186世帯である。

#### (3) 調査時期

2013年8月。

#### (4) 手続き

兵庫県下の保育所については、保育所長に調査許可を得た後に、質問紙を持参した。保育所を窓口として各家庭へ配布した質問用紙を、2013年8月26日を期日として、クラス担任に提出する、という方法をとった。また、兵庫県と大阪府在住の66世帯には、各家庭に質問用紙を配布した後、2013年8月21日を期日として、所定の場所へ投函を依頼した。保育所を利用する120世帯については、配布総数120部、回収数68、回収率は56.7%、また、兵庫県と大阪府在住の66世帯については、配布総数66部、回収数58、回収率は87.9%であった。合わせて回収率は67.7%であった。

#### (5) 質問項目

質問項目は、以下の問1から問5までの5問とした。

問1. 「リトミック」という名称を知っているか否か（選択）。

- ①知っている ②知らない

問2. 「リトミック」という名称を知るに至った情報源（選択/複数回答可）。

- ①地域で発行されている新聞  
②地域の子育てサークル等の案内チラシ  
③音楽教室や幼児教室などのパンフレット

④インターネット

⑤知り合いから

⑥本や雑誌

⑦その他（ ）

問3. リトミックが対象としている年齢について（選択/複数回答可）。

①0歳児 ②1歳児 ③2歳児 ④3歳児

（幼稚園年少） ⑤4歳児（幼稚園年中） ⑥

5歳児（幼稚園年長） ⑦6歳児（小1） ⑧

7歳児（小2） ⑨8歳児（小3） ⑩9歳児

（小4） ⑪10歳児（小5） ⑫11歳児（小6）

⑬中学生 ⑭高校生 ⑮18歳以上 ⑯65歳以上

の高齢者 ⑰その他（ ） ⑱わからない

問4. リトミックの指導者の専門性について（1つ選択）。

①幼稚園や保育所、幼児教室などの幼児教育を専門とする先生

②音楽教室やプライベートで音楽を教える音楽を専門とする先生

③幼児教育を専門とする人で、音楽もできる先生

④音楽を専門とする人で、子どものこともわかる先生

⑤体操を教える体育を専門とする先生

⑥その他（ ）

問5. 「リトミック」という名称を聞いてイメージすること（自由記述）。

### I-2. 結果

#### (1) 回答者の属性

回答者が抱える子どもの年齢の内訳は、0歳児8名、1歳児10名、2歳児14名、3歳児16名、4歳児17名、5歳児19名、6歳児16名、7歳児5名、8歳

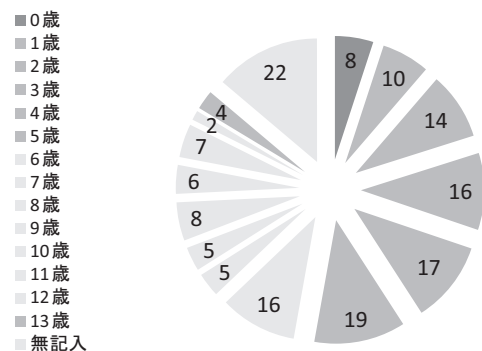


図1 調査対象126世帯における子どもの年齢の内訳

児5名、9歳児8名、10歳児6名、11歳児7名、12歳児2名、13歳児4名、無記入22名であった(図1)。世帯別に示すと、1歳から5歳までの子どもを抱える世帯が最も多く、次いで6歳から12歳までの子どもを抱える世帯となっている。本研究の調査対象者は、1歳から12歳までの幼児・児童期の子どもを抱える世帯が多くを占めている。

(2) リトミックの知名度について

リトミックという名称を「知っている」と回答した保護者は88.9% (112名)、「知らない」と回答した保護者は11.1% (14名)で、子育て中の保護者におけるリトミックの知名度が高いことが示された(図2)。

(3) リトミックを知るに至った情報源について

本質問項目では、あらかじめ質問者が提示した7項目の中から、回答者が1つ、或いは、複数の項目を選択するという回答方式をとった。その結果、「地域で発行されている新聞」13名、「地域の子育てサークル等の案内チラシ」36名、「音楽教室や幼児教室などのパンフレット」49名、「インターネット」

19名、「知り合いから」47名、「本や雑誌」15名、「その他」6名という結果であった(図3)。インターネットや本、雑誌といった媒体ではなく、音楽教室や幼児教室などのパンフレットや知り合いから情報を得ている様子が示された。「その他」の項には、「テレビ」、「愛子様の習い事」、「近隣に教室があった」、「教育の現場」、「学生時代」、という回答が見られた。リトミックに関して、主に知り合いや紙媒体で情報を得ているようだ。

(4) リトミックの実践対象者の年齢について

本質問項目では、あらかじめ質問者が提示した18項目の中から、回答者が1つ、或いは複数の項目を選択するという回答方式をとった。その結果、リトミックの実践対象年齢について、「0歳」と回答した者が37名、「1歳」が69名、「2歳」が91名、「3歳」が108名、「4歳」が93名、「5歳」が88名、「6歳」が12名、「7歳」が9名、「8歳」が8名、「9歳」が5名、「10歳」が5名、「11歳」が5名、「中学生と高校生」は該当者なし、「18歳以上」が4名、「65歳以上」が6名、「その他」1名、「わからない」12名であった(図4)。図4で示されたように、リトミックに適した年齢を3歳頃と考えている保護者が最も多く、全体的に見ると0歳から5歳の乳幼児期の子どもを対象としたものとして認識されている。回答の特徴として、3歳以上の年齢を選択している保護者は、0歳から2歳までの子どもを実践対象外と考え、リトミックが幼児期以降の子どもを対象にしたものであると理解する傾向にあり、一方、0歳から2歳までを選択している保護者は、3歳以上の子どもを実践対象外と考えリトミックが乳幼児や幼

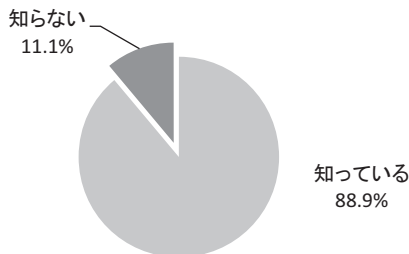


図2 リトミックという名称を知っているか否か (調査対象126世帯)

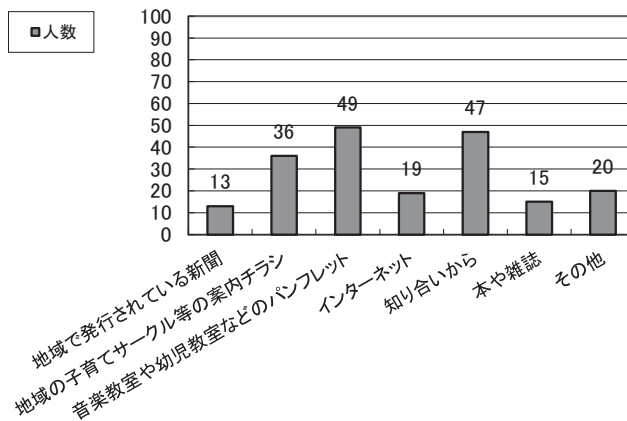


図3 リトミックを知るに至った情報源 (調査対象112世帯/複数回答可)

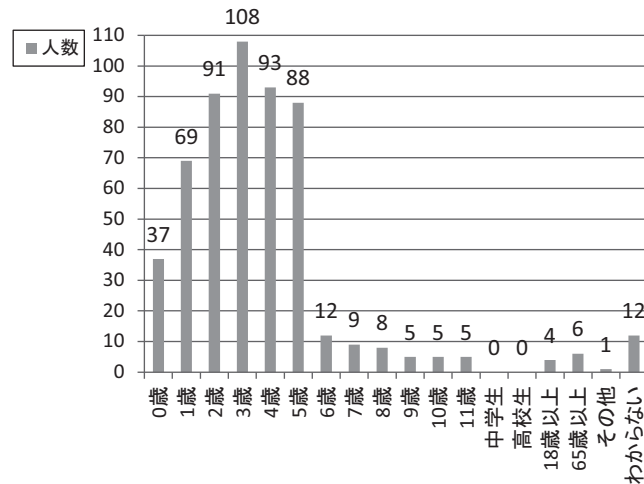


図4 リトミックが実践対象としている年齢  
(調査対象112世帯/複数回答可)

時期前期の子どもを対象にしたものであると捉えている傾向にあった。つまり、就園前後の年齢を境に、実践対象児についての保護者の捉え方に変化がみられた。

#### (5) リトミックの指導者の専門性について

本質問項目では、質問者が提示した5項目から回答者が1項目を選び回答するという方式をとった。リトミックの指導者としてふさわしい専門性について質問した結果、「幼児教育を専門とする先生」14.7% (16名)、「音楽教育を専門とする先生」8.3% (9名)、「幼児教育を専門とする先生で音楽もできる先生」48.6% (53名)、「音楽教育を専門とする先生で子どものこともわかる先生」22.9% (25名)、「体育を専門とする先生」2.8% (3名)、「その他」1.8% (2名)、「わからない」3.7% (4名)、「無記

入」0.9% (1名)であった(図5)。「その他」の項目には、「音楽教育と幼児教育の両方の専門家」、「情操教育に関する先生全般」という意見が記されていた(図5)。

調査の結果では、リトミックの指導者に求められることとして、「音楽教育の専門家」である前に、「子どものことを理解しようとしてくれる先生」であることが求められている。その上で、保護者のリトミックの捉え方によって、指導者の専門の比重が「音楽教育」と「幼児教育」のどちらかに傾くようだ。本調査では、リトミックの指導者には「音楽教育を専門とする先生で子どものこともわかる先生(22.9%)」よりも「幼児教育を専門とする先生で音楽もできる先生(48.6%)」の方が理想的であるとする回答が優位であった。ここでは、乳児から児童期の子どもを抱える保護者のリトミックの捉え方と

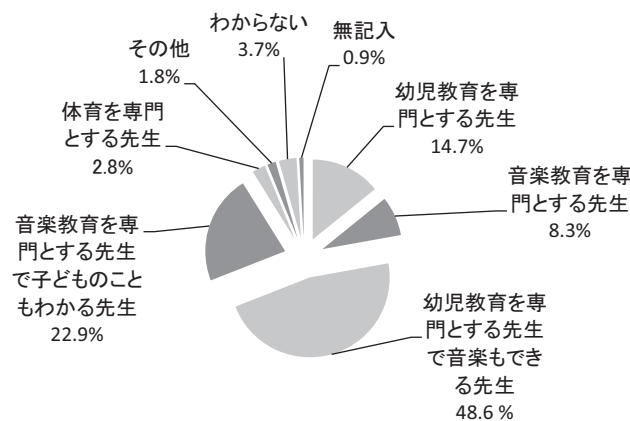


図5 リトミックの指導者の専門性  
(調査対象109世帯)

して、①幼児教育の一環であると捉えている、あるいは、②幼児教育の専門家が実践する音楽教育と捉えている、傾向が窺える。また、リトミックの指導者には「幼児教育を専門とする先生（14.7%）」あるいは「音楽教育を専門とする先生（8.3%）」が理想的だという回答を併せて検討すると、リトミックは、音楽の教育方法論としてというよりは、幼児教育の一環として捉えられているようだ。

#### (6) リトミックからイメージすること

「リトミック」という名称を聞いてイメージする事柄を自由に記述してもらったところ、「音楽に合わせて身体を動かす」と回答した者が38名、「音楽を遊びを通して学ぶ音楽教育法」が18名、「想像性を育むなど情操教育」が10名、「リズム体操」が8名、「ダンス」が7名、「幼児教育」が5名、「習い事」が4名、「親子で楽しむもの」が4名、「楽しい」が4名、「定義があいまい」が6名、「無記入」8名といった内容に分類された（図6）。これらの結果は、リトミックの定義に関する回答と、リトミックのレッスンの特徴を述べた回答に大別された。また、「音楽に合わせて身体表現する」というリトミックの特徴をイメージした回答が多数であった。

リトミックの定義に関する回答では、「音楽教育法」「情操教育」「幼児教育」「習い事」といった内容があり、子どもを対象にした音楽教育、および、情操教育といったイメージが抱かれていることが示された。ここで興味深いのは、(5)のリトミックの指導者の専門性についての質問項目では「幼児教

育の専門家」が「音楽教育の専門家」より優位であったのに対し、本項では、リトミックのイメージを「音楽教育」と回答した保護者の方が「幼児教育」と回答した保護者よりも優位であったことだ。また、リトミックの実践方法の特徴では、「音楽に合わせて身体を動かす」という回答に「リズム体操」や「ダンス」といった回答も含めて、音楽と動きのイメージが強いことが示された。

つまり、我が国の幼児教育の分野におけるリトミックのキーワードは、「音楽教育」「情操教育」「幼児教育」「音楽に合わせて動く（リズム体操やダンスも含む）」であるといえる。

#### (7) 全体のまとめ

調査の結果より、子どもを抱える保護者におけるリトミックの知名度は非常に高いことが示された。実践対象児については、リトミックに最も適した年齢を3歳頃と考えている保護者が多く、3歳を頂点に0歳から5歳頃の子どもを実践対象児と理解していた。また、リトミックの指導者の専門性については、「音楽を専門とする先生」ではなく「幼児教育を専門とする先生」が理想的であるとする考え方が優位であり、子育て中の保護者のリトミックに対する捉え方は、幼児教育の一環のものとされている傾向にあると思われた。しかし、リトミックに対するイメージでは「幼児教育」というイメージをもつ保護者よりも「音楽教育」とイメージしている保護者が多かった。

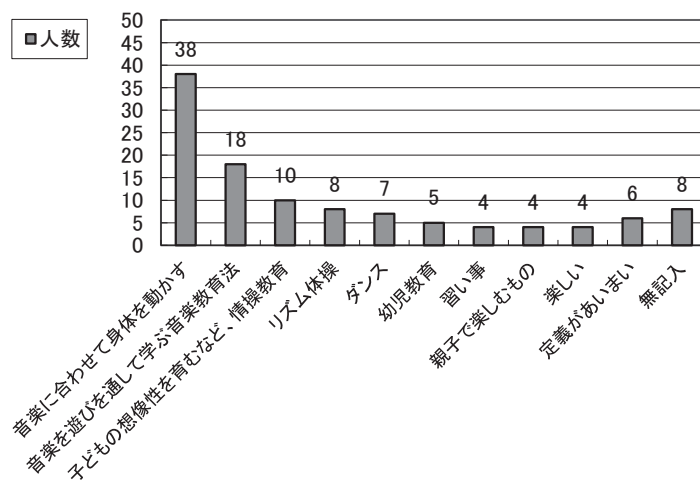


図6 リトミックのイメージ  
(調査対象112世帯)

### I-3. 考察

#### (1) 我が国の幼児教育の分野における「リトミック」の特徴と課題

ダルクローズによって考案された音楽の教育方法論であるリトミックは、我が国では主に幼児教育の分野で普及された。また、その普及の過程では、保育者によって実践されてきた経緯がある。つまり、保育の専門家である保育者の音楽的資質に適應させ、保育におけるリズム表現活動に適應した形で実践されてきた経緯がある。実際に、既刊のリトミックの指導書の多くが、保育の中でリトミックを展開する方法を紹介している。また、普及の過程では、特にリトミックのリズム運動の領域が注目され、その「音楽を聴いて身体表現する」という学びの方法は、幼児の「実体験（動き）を通して感じて学ぶ」という特性と重なり、幼児期の教育方法として適していると考えられ、保育の場で急速に普及した。このような、幼児教育の分野におけるリトミックの歴史は、現代でも、保育者が保育の中でリトミックを実践したいと思う動機に影響を与えているし、乳幼児を抱える保護者のリトミックに対するイメージにも影響を与えている。しかしその一方で、リトミックは幼児教育の分野において表面的に広まり内容の深まりを得られないまま現在に至っている現状があり、このような現状は、保育におけるリズム表現活動に限らず、保育全般におけるリトミックの意義やアプローチ方法を再考する必要性を示している。

#### (2) 「リトミック」に対する認識

本研究の結果において、乳幼児を抱える保護者のリトミックに対する捉え方は、「幼児教育の一環のもの」という傾向にあった。しかしリトミックのイメージでは「音楽教育」や「情操教育」をイメージしている保護者が多かった。つまり、乳幼児を抱える保護者の「リトミック」に対する認識は、「幼児教育の専門家が実践する幼児教育の一環のもの」とあるとともに、漠然と「音楽教育の要素もあるもの」としてイメージされている傾向にある。保護者のリトミックに対する認識は、「子どもの活動の様子」といった視覚情報に頼りつつ、歴史的な背景や様々な情報に影響を受けており、それらが混在した認識だといえる。なかでも、「リトミックは幼児教育の一環のもの」という認識はその歴史的経緯に影響され、音楽教育としての「リトミック」と幼児教育に

おける「リズム表現活動」を混同しており、区別が曖昧であることを示している。また、本調査では、リトミックの実践対象児を、3歳をピークに2歳から5歳頃の幼児と考えている保護者が多かった。この年齢の子ども達の音楽教育では、知識や技能を教えるのではなく、音楽に興味を持ち、音楽のある生活に喜びを見出し音楽に能動的に関わる態度、そのようなものの基盤を育むことが理想的だといえる。そしてその方法論の一つとして、様々なニュアンスの音楽を聴いて感じ、感じたことを身体の動きを用いて表現する、という「リトミック」の方法論が挙げられる。知識を得る、技能を習得するといった明確な結果が見えにくい、情操教育に重きを置いた幼児期の音楽教育は、その活動の目的を明確に示さなければ、受け手によって多様な捉え方が可能である。音楽教育としての「リトミック（リズム運動の領域）」も幼児教育における「リズム表現活動」も、視覚的情報のみで捉えると、同じように音楽とともに身体表現する楽しい活動として映る。しかし、その活動目的（例えば「思い切り身体を動かすこと」なのか、或いは、「音楽をしっかりと聴いて感じる」ことなのか、又は他の目的）や、用いる音楽への配慮という視点から考えてみると、その違いが明らかになるはずである。